
魔法少女リリカルなのは～灰色の軌跡～

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「PDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～灰色の軌跡～

【Zコード】

Z0378V

【作者名】

葉月

【あらすじ】

Arcadiaに投稿しているものです。この前、間違って削除しましたため、再投稿となります。「迷惑をおかけしてしまい申し訳ありません。

なのは達の傍に、大人しい少女が寄り添っていた。彼女となのは達が紡ぎだす新たな魔法の物語が始まります。

プロローグ

『誰か……僕の声を聞いて。力を貸して……。魔法の力を……』

「ん……」

白色を基調とした部屋にシングルベッドが壁際に置いてある。そのベッドの緑色の布団の山が小さく震えた。

「むー、変な夢……」

夢見が悪かったのか、眩さとともに少女がベッドからおりくつと起き上がった。少女は、癖のある肩まで伸びた灰色の髪を手櫛で整えながら、洗面所に向かつ。

「」

洗面所で癖のついた髪をドライヤーと櫛で整えていぬじ、甘えるよつの鳴き声が聞こえた。

「おはよー。」

少女の足には、黒猫が座っていた。彼女のペットで、大事な家族である。

「『』飯はちょっと待つてね」

ニアに「」をつ声を掛け、水で顔を洗い身支度を整える。

「お待たせ、ニア」

「」や「」

身支度が終わった少女は、ニアと一緒に洗面所からリビングに向かう。ニアは鳴き声で応じて、彼女の後についていく。

リビングの扉を開けるが、そこには誰も居ない。フローリングの床に絨毯が敷いてあり、4人掛けのテーブルと椅子があり、そこから見えやすい位置にテレビが設置してあった。

(お父さんもお母さんも、まだお仕事か……)

少女の両親は仕事で忙しく、殆ど家にいない。いつの間にか帰つており、いつの間にか出かけているので彼女は両親の顔をあまり覚えていない。そんな生活に少女は寂しい思いをしている。

彼女は両親に、「ミユニケーションは壁に掛けられている伝言板であり、以前そこにどういう仕事をしているか聞いた事があったが、『人々を守る仕事をしているんだよ』と返され、具体的に何をしているかはっきりしなかった。

「」や「」

「あっ、『めんね。すぐ』に『』飯用意するからね」

少女は、リビングで両親について考え方をしていたが、ニアのせ

がむ鳴き声で現実に戻る。

ニアに謝罪し、エプロンを取り出しつて台所でニアの朝食を作り始める。といつても、猫用の缶詰を皿に移すだけであるが。

「はい、お待たせ」

少女は、朝食のはいった皿と水のはいった皿を持って、ニアが寝転がっているリビングにやってきた。

「召し上がり」

ニアの前に朝食を置くと、微笑みながら頭を撫でる。

「あつ、自分のも作らないと学校に間に合わないや」

少女は台所に戻り、パンとジャムを用意し、テーブルに並べようとした時に気が付いた。そこに置かれた手紙と弁当箱に。

『アリア。忙しい事を言い訳にして構つて挙げられず』『めんなさい』

お皿のお弁当を用意しました。こんな母親でごめんね。

今とりかかっているお仕事が終わったら、何処か遊びに行きましょうね。

『黙黙な母親より』

「……お母さんのばか」

少女 アリアは母親の手紙を読み終わると、誰にも聞こえないくらい小さな声でそう呟いた。

プロローグ（後書き）

短いですが、以上でプロローグを終了します。ちょくちょく修正を入れると思うので、文章量が変化するかもしれません。

誤つて削除してしまい、申し訳ありません。今後、このような事の無い様に気をつけます。

「アリアちゃん、一緒に帰ろう~。」

放課後。アリアは教科書類を鞄の中に入れ、帰る準備をしていた時、3人組の少女達が彼女と一緒に帰ろうと誘つてきた。

「あっ！ 高町さんにバーニングスさん、月村さん」

「『『高町さん』じゃなくて、『なのは』だよ~」

「なのは……。名前で呼んでもらうのはもう諦めなさい」

「なのはちゃん……」

アリサが振り向いた先には、『高町さん』と呼ばれ頬を膨らませて抗議している高町なのは、そんな彼女に呆れているアリサ・バニグス、2人の様子を見て微笑んでいる月村すずかがいた。

「あっ……うん、『めんね』

「アリア、いちいち謝らなくてもいいわよ？ 呼び方なんて個人の自由なんだから……」

アリアは、なのはの言葉につい謝ってしまった。そんな彼女に、アリサは苦笑いで注意する。

「アリサちゃんもそのぐらうじしないと。アリアちゃん、また謝るよ。」

すずかはそんな3人のやり取りが面白いのか、笑みを浮かべて会話に加わる。

「う……、わかつたわよ。それよりアリア、一緒に帰りましょー。」

「…………うん」

アリサの逃がさないと言わんばかりの誘いに、アリアは気圧される様に頷いた。

アリア、アリサ、なのは、すずかの4人組は、今日の授業やそれぞれの興味のあることなど色々な事を話しながら歩いていた。

「？」

アリアは、公園の脇にある林が続く小道が気になり立ち止まった。

「アリアちゃん……ビーッたの？」

「なのは？ アリア？」

そんなアリアの行動を、同じ歩調で歩いていたなのはが気づいた。なのはの言葉に、アリサとすずかも気がつき足を止める。なのはは、彼女らに解らないという風に首を横にふる。

「…………

アリアはしばらくじっと小道を見ていたが、何かに導かれる様に小道に入つて行く。

「ちょっと、アリア！」

「アリアちゃん！？」

そんなアリアを見て、なのは達3人も彼女を追う様に小道に入つて行つた。

公園の脇にある林に囲まれた小道を導かれる様に歩いていたアリアは、この道の事を考えていた。

(なんだろう？ この風景……見たことある。赤い空……、擦れ合つ木々……、マントに変わった服を着た金髪の少年……。黒く丸い体に赤い瞳の獣)

「ア、アリア！！ しつかりしなさい！！」

アリアが頭に次々と浮かぶ映像を思い出してると、彼女の名前を必死に叫ぶ声で空想の世界から現実の世界に帰ってきた。

「バニーネグスさん……。どうしたの？」

「『どうしたの？』じゃないわよ！足を止めてこの道をじっと見てるかと思えば、ふらふらっと入って行くし… いくら声を掛けても反応ないし…！」

「大丈夫？」

アリアの目の前には、彼女の行動に怒っているアリサと心配そうに見つめているすずかの姿があった。

なのはの姿が見当たらないので左右を見渡して探していると、背後から「夢で見た景色だ」という咳き声が聞こえた。

振り返ると呆然としたなのはがあり、アリサとすずかが心配そうになのはに声を掛けようとした時

【助けて……】

アリアの頭にそんな声が聞こえた。

「今、何か聞こえなかつた？」

なのはも聽こえたらしく、自分以外にも聞こえたか疑問の声を放つ。

「別に……」

「聴こえなかつた……かな？」

「私は聴こえたよ……」

なのはの質問に、アリサとすずかの2人は首を横に振り、アリアは聴こえたと答えると

【助けて……】

「アリア、なのは……」

「アリアちゃん、なのはちゃん」

アリアとなのはは走り出し、すずかとアリサは2人の後を追うように走る。

「アリアちゃん、たぶん」つちの方から……」

「高町さん、あれ！！」

2人が走る先に小動物が踞まっていた。小動物の前に屈み、様子を窺う。

「どうしたの？ アリア、なのは。急に走り出して」

「あつ、見て。動物？ 怪我してるみたい……」

アリアとなのはに追いついたアリサとすずかは、なのはが抱き上げた小動物に気づく。

「うん……。え、えいじょり……」

「どうしようって……。とりあえず病院?」

「獣医さんだよ……」

「えっと、この近くに獣医さんってあつたっけ!-?」

「えっと……、この近くだと確か……」

「待つて、家に電話してみる」

「月村さん、この近くだと槇原動物病院だよー」

「ナイスよ! アリア。場所分かる?」

「ええ……」

アリア達は小動物の怪我に慌てふためき、病院もとい獣医の所に連れていく事になつた。その場所はアリアが知つており、彼女を先頭にその動物病院に向かつた。

アリアの案内では達は、怪我した小動物を治療するために槇原動物病院にやつてきた。アリアはその獣医さんと顔馴染みの様で、彼女が事情を説明するとすぐに小動物の治療を行なつた。

「まあ、怪我はそんなに深くないけど、ずいぶん衰弱しているみた

いね。ずっと1人ぼっちじゃないかな?』

「院長先生、ありがとうございます!」

『ありがとうございます!』

女性の獣医 動物病院の院長は、後片付けをしながら治療の結果をアリア達4人に報告する。

アリアは治療のお礼を言つと、なのは達も続いてお礼を言つた。

「これって、フェレットですよね? ビニカのペットなんでしょうか?」

アリサは、胴体に包帯を巻いて眠っている小動物 フェレットの様子を見ながら、片付けを終えた院長先生に質問する。彼女によるとフェレットにしては珍しい種類らしく、どの種類か判別できないようであった。

アリアはフェレットを撫でようと手を差し出そうとしたところ、そのフェレットが目を覚ました。

「あつ、起きた……」

フェレットが起き上ると、すずかが感激の声を上げる。

フェレットは、アリア・すずか・アリサ・なのは・院長先生の順に視線を動かした。そして、なのはをじっと碧の瞳で見つめる。

「なのは、見られてる」

「えつと……、えつと……」

アリサは、なのはに小さな声でフュレットに見られてる事を告げる。

なのはは、戸惑いながら右手をフュレットの前に差し出す。

「わあ……」

フュレットは、なのはの手の匂いを嗅ぎ、ペラヒとなの指を舐めた。

なのは達はその姿に感激していたが、フュレットは氣絶するように身体を横にした。

院長先生は、しばらく安靜にした方が良いとアドバイスし、明日まで動物病院で預かることになった。

「すみません。また明日きます」

『あっがとうございました』

アリア達は、明日引き取る約束をして動物病院を後にした。

「あのフュレット……、どうしよう……」

帰り道。アリアの脣きにみんなは「つん」と唸りながら、頭を悩ませた。

「つむには、庭にも部屋にも犬がいるし……」

「「Jリーチもネコがいるから……」

「「Jリーチは食べ物商売だから、原則としてペckettの飼育はダメだし……」

「…

「私の家も月村さんと同じで、ネコがいるし……」

バーニングス家には犬が、月村家とアリヤンション家には猫がいるため、フェレットを飼うのが難しい。飼育することになれば、フェレットは確実に餌になる。

ペckettを飼っていない高町家だが、駅前で有名な喫茶翠屋を経営しているため、こちらも厳しかった。

「やつぱり、みんな無理だよね……」

望み薄とわかっていたのか、アリアの落胆は少ない。

またみんなで頭を悩ませていると、駅前の大通りに出る。「Jリーチ解散となるが、フェレットの問題が片付いてないので、解散できない。しばらく、みんなはそれ意見を述べたが、根本的な解決策は出てこなかつた。

「うーん。とりあえず、みんなに相談してみるね？」

いい考えが浮かばないからか、高町家で一時的に預かるという形で相談してみると、なのはが提案した事でとりあえず解散となつた。

「ただいま」

アリアは、なのは達と別れた後にスーパーで晩御飯の買い物を終わらせて帰宅した。

『ただいま』という挨拶をしても、帰つてくる声はない。アリアが住む部屋は静寂が支配するのみである。

「ニアは寝てるのかな？」

アリアは買い物袋を持って、ニアの住処となつているリビングに足を向けた。

リビングに入ったアリアは、ニアがいつも寝転がつているソファーを確認したが、黒い身体は見当たらなかつた。

「あれ？ 私の部屋かな？」

ニアはリビングにいなければ、いつもアリアの部屋のベッドで丸くなつている。

「ニアのご飯を早く作つて、今日一日のスキンシップをしよ

アリアの一日の楽しみは、ニアとたくさんじやれあう事であった。彼女は、ニアと何して遊ぶかを色々考えながら、自分とニアの分の夕食を作り始める。

アリサちゃん、すずかちゃん、アリアちゃん。
あの子はさうちで預かれることになりました。

明日、学校の帰りにいつしょに迎えにこひつね。

なのは

フローレットを引き取れる許可が下りたなのはのメールに『気がついたのは、ニアと遊んだ後であった。

「ふあ……。遊びすぎちゃった……。今日はもう寝ないと」

時計を見ると時刻は午後10時。ほととぎの小学3年生は既に寝ている時間。

アリアは、欠伸を噛み殺して部屋の戸締まりを始めた。まずは、自分の部屋の窓の鍵を閉める。続いて、あまり使用しないいくつかの部屋の鍵を閉め、リビングにやってきた。

リビングで戸締まりのチェック。最後に玄関の鍵を閉めて、戸締まり火の元と水まわりのチェック。この金属音は、ニアと遊んでいる間も聽こえた。耳障りな音に顔をしかめて気にしなこうにしていった。

「「う……。不愉快な音」

改めて耳障りな音に顔をしかめるアリア。耳をふさいでも金属音は頭に響き、びびりしそうもなかつた。

「ああ、もう…」「るわこ…」

アリアはこの不愉快な音の正体を突き止めるために防犯用の木刀を手に取り、家を出た。

「でも……、この音はどうで鳴ってるんだろ?」

勢いよく家を出てきたが、肝心の音の出所がわからず、近くの十字路で途方にくれていた。

「くつ……、また? ……えつ?」

再びキンキンという金属音に、アリアは頭を押さえるが音はすぐにおさまった。

音が止むと同時にアリアの市街地の方角から、ピンク色の光の柱が立ち上った。

「あれは……なに?」

巨大な光の奔流に、アリアの頭は疑問符でいっぱいになつた。それから、頻繁に聴こえていた金属音は一切鳴り響いていなかつた。アリアは、音と関係あるか確認するために光の柱のもとへと駆け出した。

第1話（後書き）

以上で、第1話をお送りいたします。この話は、アニメの1話にあたります。キャラクターの言動は変にならないよう気を付けたつもりですが、どこかおかしいところがあればお知らせください。

ピンク色の柱はもうすこし見えなくなつており、アリアは柱があつたであろう方角を思い出しながら、髪が舞う速度で駆けていた。家を出るときに持ち出した木刀は、柄頭を上に刃を下にして左手で鍔にあたる部分を持つていて。

(次の道を右に曲がれば、槇原動物病院まですぐだつたはず……)

アリアは槇原動物病院への道を思い出しながら、十字路を右に曲がつたとき、誰かに思いつきり衝突した。

「きやつ……」

「……」

アリアと衝突した相手は、ぶつかつた衝撃になすすべなく尻餅をついた。

「いたた……。すみません! 急いでいたので……?」

「いぢりいや……すみま……せん?」

アリアとぶつかつた相手は、互いの姿を認識すると言葉に詰まつた。

「えっと……。アリアちゃん？」

「た……高町さん？」

アリアとなのははお互い驚きを隠せず、戸惑いの表情を浮かべて固まつた。

なのはは、青いラインが肩や袖口に入り、胸元に赤いリボン、スカートの裾にフリルがついた聖祥大附属小学校のような服装、左手に赤い宝石がついた杖、右手にはフェレットを抱えていた。

「早く起きてください！ 来ます！！！」

フェレットの叫びに、アリアは蝶るフェレットに驚き、なのはは慌てて立ち上がり後ろを振り返る。

「えっと……えっと……。どうすればいいのー？」

「さつき言った封印をするには、呪文が必要なんです。心を澄ませて。心の中に貴女の呪文が浮かぶはずです」

なのはは、呪文といふ言葉に疑問を抱きながら、心を澄ますために目を瞑つた。

唸り声が轟くと黒く丸い身体を持つ生き物が、なのはを目指して

飛び跳ねてむかってきた。

なのはは目を見開いて、持っていた杖を構える。

『 protection .

杖から女性の声が聞こえたと思うと、なのはの前にピンク色のバリアが出現する。

そのバリアは黒い獣から伸びた触手を防ぎ、搔き消す。

「リリカルマジカル」

「封印すべきは惡まわしき器。ジュエルシード！」

「ジュエルシードを封印！」

『 sealing mode . set up .』

なのはが呪文を唱えると、杖の柄の部分からピンク色の羽根が出現する。赤い宝石からピンク色の帯が伸びて、黒い獣を拘束した。黒い獣の額に、ローマ数字の21が浮かび上がる。

『 stand by ready .』

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル21。封印！」

『 sealing .』

再び、帯が伸びて黒い獣に突き刺さる。

黒い獣は、苦しいのかつめき声を上げ、消滅した。

「あつ……」

なのはは、獣がいた場所に光る物を見つけた。

「これがジュエルシードです。レイジングハートで触れて……」

なのはは、フュレットに言われた通りに、レイジングハートを菱形の水色の宝石 ジュエルシードに近づける。
ジュエルシードは、レイジングハートの宝石の部分に吸い込まれた。

『receipt number XXXI .』

ジュエルシードが吸い込まれると、なのはの服装がもとのオレンジのパークーとスカートに、杖は小さい丸い宝石に戻った。

「あ、あれ？ 終わった……の？」

「はい……。貴女のおかげで……。ありがとうございます……」

なのはの戸惑った咳きこみ、フュレットは限界だったのかお礼を言った後に気絶した。

(高町さん……すうじ……)

なのはが黒い獣を消滅させる一部始終を見たアリアは、驚愕の表

情を浮かべていた。なのはは怯える事なく果敢に立ち向かい、消滅させた彼女をアリアは羨望の眼差しで見ていた。

(「」の音は……サイレン?)

ふと、遠くからパトカーのサイレンが響いていた。誰かがこの騒ぎを警察に通報したようである。アリアはこの場所にいると、厄介な事に巻き込まれると思い、慌てて立ち上がった。なのはも、この場にいるとまずいと認識しているのか、気絶したフェレットを抱え、慌ててアリアの所にやってきた。

「アリアちゃん!…」

「高町さん。早く逃げないと……とてもまずいことになるかも……」

「やうだよね……」

なのははとアリアは冷や汗を額に浮かべていた。サイレンが次第に近付いてくる。

『「とりあえず、……」めんなさい』

2人は塀や電柱が壊れ、道路も抉れた現場を慌てて離れた。

「ハア……ハア……」

「……疲れた……」

アリアとなのはは、公園で一休みしていた。黒い獣と戦闘のあつた現場から一目散に逃げたため、息が切れていた。休憩のため、ベンチに座つて体力の回復に努めていた。

「……すみません」

「あっ、起こしちゃった？　ごめんね、乱暴で。怪我いたくない？」

小さく謝る声が聞こえた。走つた事で怪我が酷くなつてないか心配になつたなのはは、フェレットを案じた。

フェレットは、怪我はほとんど完治したから心配いらないと答へ、身体を震わせて巻いている包帯をほざいた。

「助けてくれたおかげで、残つた魔力を治療にまわせました」

「よくわかんないけど、そなんだ……。ねえ、血口紹介していい？」

「あっ、うん」

なのははフェレットが頷くと、咳払いをして……、

「私、高町なのは。小学校3年生。家族とか仲良しの友達は『なのは』って呼ぶよ」

「……」

「アリアちゃん？ 次、アリアちゃんの番だよ？」

「えつ！？」

「大丈夫？」

「つ、うん……」

呆けているアリアをなのはは、心配そうに見つめていたが、彼女の返答に笑顔になる。

「えつと……、アリア・リヒテンシュタインです。高町さんと同じ小学校3年生で、クラスメイトです。みんなは『アリア』って呼んでます」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

「ユーノ君か……。可愛い名前だね」

なのはとアリア、フレットは自己紹介をしてお互いの名前を知った。なのはは、ユーノの名前を聞き『可愛い名前だね』という咳きに、アリアは可愛い？と首をかしげる。

「すみません……。貴女達を巻き込んでしまいました」

ユーノは、なのはとアリアを交互に見ると頭を下げる謝罪した。アリアは、ユーノのセリフに先ほどの場面を思い出し、謎の金属音と光の柱を追った結果があれとは憂鬱な気分になつた。

（あ～、色々あって頭が痛いよ～）

「あつ、そうだ。ゴーノ痴怪我してるんだし、此処じや落ち着かな
いよね？ とりあえず私の家にいきましょ？ あとはそれから」

なのはの提案に、ゴーノは頷く。

「えつと……、高町さん。私も高町さんの家にお邪魔していい?
私にも説明して欲しいんだけれど……」

「あつ、やうだよね……。ゴーノ君いい？」

「はい……。彼女も巻き込んでしまいましたから」

時間も遅いので、とりあえずなのはの家に向かう事になのはとゴー
ノに、今回の出来事を説明してもうつために、アリアも付いて行
く事になった。

ベージュを基調とした部屋に携帯電話のアラームが鳴り響いてい
る。アラームは2種類鳴っており、音源はベッドとドアに敷いている
布団からであった。

まずははじめにアラームが止まつてのは、布団で鳴っているアラ
ームであった。

「ん~？」

掛布団が捲れ、灰色の髪を持つ少女が上半身を起こした。顔を見

るとまだ覚醒していないのか、田を擦ったり欠伸をしたりしている。

「ふあ～」

彼女の気配で田が覚めたのか、この部屋の主である栗色の髪を持つ少女も起床した。

「おはよう。アリアちゃん

「おはよう。高町さん

2人はお互いの笑みを浮かべて『おはよう』と挨拶を交わす。

「ユーノ君もおはよう」

「あ～、その……。おはよう。なのは、アリア」

「ははは、おはよう……」

すっかり打ち解けたのかユーノに笑いかけるなのはに対して、まだユーノに慣れないのか苦笑いを浮かべて挨拶をするアリア。

(喋るフェレットって……。流石異世界……。色々すこいんだな～)

あれから高町家にやつて来たアリアは、なのはの家族に嘘と事実を織り混ぜながら事情を説明した。彼女の家族は微笑みながら話を聴いていた。話が終わつた時、だいぶ遅い時間だったので、そのまま泊したのだった。

その後、アリアはなのはの部屋で、ユーノと先程の獣やその核となるジュエルシードについて、彼の故郷や魔法についての軽い説明

を受けて就寝。詳しい話は翌日の放課後にとこつ話になった。

「アリアちゃん。早く着替ないと学校に遅刻するよ」

「あっ、そうだね。高町さん」

起床した時間は午前6時だが、アリアが高町家から帰宅し学校の準備する時間を考えれば、余裕のある時間ではない。2人は慌てて着替え始めた。

アリアは昨夜着ていた紺のジャージに、なのはは聖祥大附属小学校の制服に着替え、高町家のリビングに向かった。2人が着替えている時、何故かユーノはバスケットで丸くなっていた。

「お父さん、お母さん、おはよ〜〜」

「おはよ〜〜わ〜〜ます。士郎さん。桃子さん」

2人がリビングに現れると、テーブルにはなのはの父親である高町士郎が、キッチンには母親である高町桃子がいた。士郎は新聞を読み、桃子は朝食を作っていた。

「桃子さん、恭也さんと美由希さんは何処に居られるのでしょうか？」

アリアは、朝食の配膳を手伝いの中姿の見えないなのはの兄と姉の行方を桃子に訊ねた。

「2人は今、道場で鍛錬をしているのよ?」

「鍛錬……ですか?」

「ああ、家の裏に剣道の道場があるんだよ」「みだよ」

桃子の言葉に何か引っかかるアリア。

そんなアリアに、士郎が御神流といつ流派の道場を開いていると説明した。

「なのは、アリアちゃんと一緒に恭也と美由希を呼んで来てくれ

「はい。アリアちゃん、道場はいつちだよ」

士郎の頼みには元気な声で応え、アリアを連れて離れの道場に兄と姉を呼びに家を出た。

挨拶を済ませたのはとアリアは、美由希にタオルとスポーツドリンクを手渡す。

「2人ともありがとうございました」

「じゃあ、今日の所はここまで。続きは学校から帰つてから」

「はい」

タオルとスポーツドリンクを受け取った美由希を見て、彼女の師範である恭也は、早朝練習の終了を告げる。

美由希は恭也の鍛錬終了の宣言を聞き、受け取ったタオルで汗をスポーツドリンクで水分補給をして頷いた。

「バニングスさん、月村さん、高町さん。おはよう」

「おはよう。アリア」

「アリアちゃん。おはよう

「おはよう」

高町家から自宅に戻つたアリアは、学校の準備をして登校した。教室に入ったアリアは、アリサ・すずか・なのはに挨拶を交わした。

「ねえ、アリア

」

アリサがアリアに話し掛けたと同時に、授業が始まるチャイムが鳴る。

「じめんね、バーニングスさん。また後で……」

「あつ、うん」

「ほら、アリサちゃん。先生来るよ」

皆が着席したところで、担任の女性教師が入室する。未知の世界に足を踏み入れた生活が始まった。

第2話（後書き）

以上で、第2話をお送りします。なのはやんの初封印の場面にじぶつ違和感なく関われるか考えたのですが、どうでしょつか？あと、ユーノが2人に説明する描写を流したのは、説明の部分を思考錯誤中ですので、ご容赦ください。

放課後、昨晩の出来事の詳しい説明をユーノから受けたため、アリアは再び高町家へやつて来た。

「じゃあ、昨日の詳しい説明をするね」

「あつ、うん」

「.....」

なのはの部屋でユーノ・なのは・アリアの3人が円の形に座っていた。

ユーノの台詞に、なのはとアリアは真剣な表情で頷く。

「まず、今回の出来事の原因となつてゐるジュエルシードなんだけど……、あれは僕らの世界の古代遺産なんだ。本来は手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど、力の発現が不安定で……昨夜みたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を与える場合もあるし……」

アリアとなのはは、『周囲に危害を与える』といつ言葉に昨夜の黒い獣を思い出す。

「たまたま見つけた人や動物が間違つて使用してしまって、それを

取り込んで暴走してしまつ」ともある「

説明を聞いていた2人は、ジュエルシードの危険性を認識し、早期に集めないとダメだと決意する。

「ユーノ君。なんでジュエルシードがこの世界に散らばっちゃったの？」

アリアの疑問に、ユーノはしょんぼりと頭を垂れる。
そんな様子に、なのはは心配そうに彼を見つめた。

「…………僕のせいなんだ。僕は故郷で遺跡発掘を仕事にしているんだ……。そしてある日、古い遺跡の中であれを発見して、調査団に依頼して保管してもらつたんだけど……」

ユーノが遺跡発掘に携わつていりことに関心するアリアとなのは。アリアは興味津々という目で、なのはは単純に凄いという表情でユーノの説明を聞く。

「運んでいた時空艦船が事故か人為的災害にあつてしまつて……。21個のジュエルシードがこの世界に散らばつてしまつた……。いままで見つけられたのはたつた2つ……」

「あと19個かー」

なのはの呟きが部屋に響き、なんとも言えない沈黙が辺りを支配する。

「あれっ？ ちょっと待つて……。話を聞く限りではジュエルシードを散らばつちゃつたのって、別に全然ユーノ君のせいじゃない

んじゃ……？

「だけど……。あれを見つけてしまったのは僕だから……。全部見つけて……、ちゃんと在るべき所に返さないと駄目だから……」

なのはの指摘に、ユーノはジュエルシードを見つけたのを悔いでいるのか、霸氣のない罪悪感に満ちた声を洩らす。

「えへと……その、ジュエルシードを見つけたときは、昨日高町さんが行なった封印？をすれば大丈夫なんだよね？」

再び訪れた静寂に、アリアは昨日のなのはの様子を思い出し、ユーノに疑問を口にする。

「うん……。ちゃんと封印されれば暴走の危険はないよ」

それを聞いたアリアとなのはは安心する。

それからは、魔法についてやユーノの世界についての説明が行われた。

空が夕焼けに染まる頃。ようやくアリアは高町家を出た。

ジュエルシードの回収は、なのはとユーノが行う事になった。アリアは参加すると主張したが、『魔法の才能はあるが、使えない状態で搜索に加わるのは危険』とユーノに強く反論され、渋々引き下がるしかなかつた。

「魔法かー」

アリアは、自分が魔法を使う姿を思い浮かべながら自宅に足を向けていた。火や水を自在に扱う自分の姿に彼女の頬は弛みっぱなしだった。

「 つー？」

次の角を曲がれば家に着くという所で、また金属音が聴こえた。アリアはジュエルシードが発動したと感じ、勘を頼りに行き先を自宅から発動場所へと変更した。

「なのはーー レイジングハートを起動してーー」

「起動ってなんだっけ?」

「 “我、使命を受けし者なり” から始まる起動パスワードを

「ええ？ あんな長いの覚えてないよー？」

「もう一度言づから、繰り返してーー。」

「う、うんーー。」

アリアは勘を頼りに神社に駆けつけると、なのはとユーノが漫才をしていた。4つ目の犬の化け物が襲いかかる状況で。

どうやら、なのははレイジングハートを起動せずに犬と対峙した
ようだつた。

(高町さん……。いくらなんでも無茶苦茶……)

アリアはその状況に呆れ、言葉が出なかつた。

「きやつ！！」

(高町さん！)

犬の化け物は、もたもたしているなのはとコーノに襲いかかる。
アリアは、彼女に襲いかかる化け物に対し、鞄から取り出した
ある物を投げつけた。

「…………！」

投げつけた物は見事になのはの横を抜け、化け物の額に当たる。
化け物は標的をなのはからアリアに変え、襲いかかつた。

「高町さん、あとはよろしく――！――！」

アリアは一目散に参道脇の森林に逃げ、化け物も追いかけるよう
に入つていつた。

『…………えつ！？』

境内には氣絶した女性と状況に思考が追いついていないなのはと
ユーノ、化け物を引き付けたアリアの筆箱。

「アリアちゃんっ！？」

「アリアっ！？」

思考がやつと状況に追いついた2人。なのはは急いでレイジングハートを起動して、バリアジャケットと杖を装備、コーノは彼女の肩に乗つて森の中に入った。

「ひつ！？」

可愛らしい顔立ちに恐怖の色を浮かべているアリアは現在、犬の化け物に追いかけられている。内心では、なのはとコーノを助けるためとはいえ、筆箱を投げつけるんじやないと後悔していた。

化け物は、跳躍を使って前肢の鋭い爪と強靭な顎による噛み付き攻撃を繰り返している。

アリアは、それらの攻撃を速度を利用した前転と跳躍で凌いでいる。しかし、本来の姿であろう犬という動物とスポーツをしていない小学3年生では、筋肉の使い方や体力面で大きな違いがある。徐々にだが、化け物の攻撃が当たる様になり始める。それにより、あちこちに土が付いた学校の制服が、爪による薙ぎ払いや噛み付きで背中や腕を中心に破れ、色白の肌が晒される。

(高町さん、早く来て！！)

アリアは、追いつかれるのは時間の問題と感じ、追いかけられる化け物に唯一対抗できる友達の一刻も早い到着を祈る。

「あつ 」

緊迫した状況で他の事を考えるのは命取りとなる。アリアは、地面に顔を覗かしていた木の根に足を取られ、バランスを崩す。そこに化け物の爪による攻撃が加わり、彼女の腕が引つかかり吹き飛ばされる。

「 つー！」

アリアは地面に腕や足など全身をぶつけながら転がる。そして、木の幹に背中を打ち付けることで回転は止まった。しかし衝撃止まらず、彼女の肺の空気が殆ど抜ける。

「かはつ

アリアは、全身を打ったことによる痛みと肺の空氣を一時的に失つたことによる朦朧とする意識の中、自分の人生が終わることを悟つた。

(ああ、終わりなんだ……。高町さん、丹村さん、バーニングスさん……。わよひなう。お母さん、じめんなさい)

化け物がどぎめとばかりに跳躍から全身を使った攻撃を、アリアは意識を手放す事で受け入れた。

「あら？ 諦めるのかしら？ 起きなさい。リヒテンシュタインの名を継ぐ子よ」

「えつ
」

尊大な女性の声に、アリアは覚醒する。目を開くと彼女の前に黒猫が座つており、犬の化け物を見据えていた。

「貴女はここで死ぬ運命じゃないわ」

アリアも猫の見据える先を見ると、円形に一つの四角形が回転する白銀の魔法陣が、犬の化け物を阻んでいた。その様子にアリアは呆然となる。

「呆けてないで手伝いなさい。アリア・リヒテンシュタイン。封印は貴女しか出来ないのだから……」

「封印？」

猫の台詞にアリアは驚く。自分にも、なのはがやつていた事が出来るのだという事を。

「む、無理！ 私は魔法なんて使えない……」

アリアの叫びに、黒猫はふんと笑い飛ばす。魔法の才能があると、いう、フレットもどきの言葉を思い出せど。

アリアは、確かにそんな事をユーノが言つていたと思い出しが、なのはが持つているような杖がない状況で出来るわけがないと思つ。

「邪魔よ！ この駄犬！！」

説明の途中で邪魔をしてきた犬の化け物に対し、黒猫は正面に展開した白銀の魔法陣を爆発させることで距離を稼ぎ、動きを鈍らせた。

「さて、話の続きよ。アリア・リヒテンシュタイン」

黒猫は振り返り、アリアと視線を交わす。

「封印に使う者はこれ。後はこれを起動させれば、貴女は立派な魔導師よ」

黒猫は、小さい魔法陣を出現させ、カバーが空色の分厚い本が召喚される。

「さあ、受け取りなさい。アリア・リヒテンシュタイン。古代の英知が詰まつた禁書を……」

アリアは恐る恐る、黒猫が禁書と呼んだ本を取り、その様子に黒猫は満足した笑みを浮かべた。

「さあ、心に浮かべなさい！今、この状況を切り抜ける力を！敵を打ち倒す力を！」

アリアは、ここまで来る途中で負つた全身の痛みを我慢して想像する。この状況を切り抜ける力を、敵を打ち倒す力を。

「来れ！！ 禁書に眠りし力よ！ グレイプニル！」

アリアの叫びに応じ、犬の化け物の足元で黒猫と同じ魔法陣が展

開される。そこから、黒く細長い鎖が犬の化け物を捕らえる。

化け物は、抵抗する様に身を捩るが抵抗すればするだけ、拘束する力は強くなる。

「封印は弱らせてからよ。アリア・リヒテンシュタイン。そして、封印するための力をイメージしなさい」

「は、はい！！」

黒猫の助言に従い、アリアは弱らせる力をイメージする。

「来れ！！

「アリアちゃん！！」

アリアが化け物を弱らせるための力を召喚しようとした時、ようやくなのはが追いついた。

「高町さん、ユーノ君！？」

「アリア、これはいつたい！？」

ボロボロの制服を纏い、分厚い本を持つているアリアと彼女の足元に座っている黒猫の姿を見たユーノは戸惑い、犬の化け物が細長く黒い鎖で拘束されている光景に驚くなのは。

「あら？ 時間切れ？」

対して、黒猫は残念そうな声を上げる。

なのはとユーノは得体の知れない黒猫に警戒し、杖を向ける。

「ジュエルシードの封印は無理だつたようね……。まあ、色々と分かつた事があつたから良かつたけど……」

「君は何者なんだ！？」

「秘密よ。知りたかつたら誠意を見せなさい。高く付くわよ」

コーノの言葉をぞんざいな態度であしらひ黒猫。

「さて……。邪魔が入つたから帰らせてもらひわ。あと、ジュエルシードの封印はそつちに任せせるから」

「待てつ！－！ どうしてジュエルシードの事を…」

黒猫は、コーノの言葉を無視。アリアに意味深な言伝を残し、背中を見せて歩き出す。

「アリア・リヒテンシュタイン、今日は楽しかつたわ。お礼に怪我を治しとつてあげる。また会いましょう？」

黒猫はそう言つと、足元に魔法陣を開き転移する。アリアに治療魔法を、グレイブールで拘束した犬の化け物を残して。

第3話（後書き）

以上で、第3話をお届けします。

アニメ2話の神社でのジュエルシード集めにアリアを介入させたオリジナルとなりました。

アリアの魔法デビューです。まあ、なのはと比べてすこい地味なデビューですが。

「えつと……、ビー？」

アリアは、状況を把握しようと辺りを見渡していた。しかし辺りは薄暗く、現在いる場所が部屋であることにぐらうしか、判らなかつた。

「落ち着かないと……。たしか、ジュエルシードを封印して？」

彼女は冷静になろうと、自分がどうして薄暗い部屋にいるかを思い出す。

拘束を解いた犬の化け物をなのはが再び捕られ、無事にジュエルシードを封印した事により化け物は消滅。ジュエルシードを確保したなのはとユーノが、黒猫がどうしてジュエルシードの事を知っているか聞くため、自分に近寄った事で白銀の魔法陣が発動。ユーノが何か叫んでいたが気がつくと、この部屋に立っていた。

「うん！ 絶対にあの黒猫だよね！？」

状況整理が終了し、知らない部屋にいるのは、白銀の魔法陣から黒猫の仕業だと再認識し、黒猫が姿を見せたら自分の家に帰してもらおうと説得の内容を考えていると、「ツツツ」という足音が聞こえた。

「誰……？」

灯りの高さや足音から、人であることが分かる。しかし、アリアにはここにやつて来る人物に心当たりがない。やって来るはずの黒猫は猫なので、まず足音はしない。

やつてくる人物について、誘拐した方法から色々と理由を考えていると、アリアは最悪の考えに辿り着いてしまう。

「わ、私……」

それは、奴隸として男性に買われ、屋敷で一生働かされた挙げ句、玩具にされるといった考え方であった。

しかし、現代の日本 魔法世界は不明だが でそのような事例があるはずもなく、捕まる確率が高い犯罪に手を出そうといった輩はあまりいない。

アリアは恐怖から、部屋の隅に置いてあるベッドの毛布に潜り込む。足音は別の何かのもので、自分には無関係であると思い込む。

「いや……」

しかし、足音はアリアがいる部屋の前で止み、鍵を解除する音が部屋に響く。

彼女は毛布を頭まで被り、耳を塞いで全ての音を拒否しようとした。

【そんなに怯えなくても大丈夫よ？ アリア・リヒテンシュタイン】

そんな小さな抵抗を嘲笑うかの様に、相手は念話で「コンタクトをとつてきた。その声は、聞き覚えのある声であった。

「えつ……？」

尊大な態度を思わせる雰囲気を持つ声に、アリアは被っていた毛布から頭だけを出し、驚いた。

そこには、漆黒の髪をボニー・テールに纏め、警戒を解くためか二コニコと微笑み、蒼のチャイナ服を纏う美しい女性が椅子に座っている。

傍の机には、ランタンと軽食 サンドイッチとオレンジジュース が置いてあった。

アリアはしばらく見知らぬ女性を驚いた顔で見ていると、彼女は笑みから困った表情になり、溜め息を吐いた。

「はあ……。やっぱり、声だけで誰だか判別するのは無理よね」

女性はそう呟くと座つたまま、足元に魔法陣を展開させる。ランタンの橙色と魔法陣の白銀の光が部屋を照らす。

「助けてくれた猫 ？」

白銀の光が消えると女性の座つていた椅子に、体長20cmの黒猫が座つていた。

アリアは飛び起き、先程の変化や神社の森での出来事など、疑問に思つていた様々な事を黒猫に訊ねた。

「質問に答えてあげるから、落ち着きなさい。アリア・リヒテンシユタイン」

黒猫は再び女性の姿に変身し、アリアに落ち着くよう宥めた。

「冷静になつたわね？ まずは服を着替へなさい。ボロボロの服だと風邪をひくわ」

女性はそういうと、白銀の円と一重の正四角形を持つ魔法陣を開させ、服を召喚した。

女性の指摘に、改めて自分の服装を見たアリアは慌てた。聖祥小学校の制服は背中と腕を中心に破け、スカートは足首まであつた丈が膝まで短くなっていた。

「

「

彼女は声にならない叫び声を上げ、女性が召喚した服をかっさり、毛布を頭から被つて着替えた。

「うひうひ

着替え終わったのか、アリアは頭だけを毛布から出し、目尻に涙を溜めて女性を睨み付ける。

「ふふふ。よく確認しないのが悪いわよ？」

そんな様子が楽しいのか、女性はクスクスと笑っていた。

「さて、お遊びはこれぐらいにして……。貴女の質問に答えるわ？ 何故ここに呼んだのか、神社の出来事はなんだつたのか……をね

女性は淡々と話しかけ始めた。アリアを転送してまで呼んだ理由、犬の化け物を拘束した魔法、その時に使用した本の事を。

「貴女をここに招いた理由は、私の“マスター”になつてもうりつた
め……」

女性の台詞に警戒の眼差しに変わるアリア。

「マスター……？」

彼女がそう呼ばれる事を考へている間、女性の説明は続く。

「“マスター”ってのは、この本の持ち主になる人の事を言ひわ
女性はどこから取り出したのか1冊のカバーが空色の分厚い本を、
アリアに差し出す。

「えっと……。これって、あの時の？」

アリアの質問に頷く女性。

その本は、神社の森でアリアの命を救い、初めて魔法を使った媒
体となつた物であった。

「この本は『白夜の魔導書』。遙か昔に作られた様々な次元世界の
武器を記録する魔導書よ」

アリアは、恐る恐るその魔導書を取り、パラパラとページを
捲る。ページには、武器や兵器の名前と持ち主、蒐集した時代や能
力について記されていた。その内容に彼女は悪寒が走る。

「話しに戻るわ。簡単に言うと貴女にこれを管理してもらいたいの

「ええっ！？」

突拍子のない話にアリアは驚愕する。彼女は物騒な物を管理できないと、慌てて魔導書を女性の手に突き返す。

魔導書を残念そうな表情で受け取った女性は溜め息を吐き、魔導書の使い方や魔法について詳しく説明する。

「この魔導書はさっきも言った通り、様々な武具や防具を記録しているわ。貴女はその力を行使することができる。記録されている武具を召喚する、魔法という形に変換する、デバイスとして使うなど様々な形があるわ。それで、魔法は」

説明が一段落した所で、再びマスターの件を話すが、アリアはまだ渉っていた。

「『管理する』と言つても、ただ持つてるだけでいいのよ？ 実質的な部分は私が担当する。それに……、この力をどう使うのかは貴女の自由」

「あのっ……断る事はできませんか？ “持つてるだけ” って言われても、なんだか怖いし……」

女性は諭すような口調でアリアに話しかける。

しかし、アリアは本の内容に怯え、女性の頼みをあざすと断つた。

「…………そう、残念だわ」

彼女の返答を聞いた女性は、悲しそうに眉を下げて言葉を紡いだ。

「今日は遅いから泊まつていきなさい。明日の朝に送り届けてあげるから。あと、軽食だけど夕飯を用意したから食べなさい」

相当な時間が経っていたらしく、女性はそのまま留まる事を勧める。

窓が見当たらず、時計のない部屋にいるアリアとしては、彼女の言葉を信じるしかない。

「あ、ありがとうございます……」

「おやすみ。アリア・コヒテンシユタイン」

アリアの言葉を聞き流す様に、女性は就寝の挨拶をして部屋を退出した。

「あっ、私……この恰好で寝るの？」

女性が退出してしまってからして、アリアは自分の恰好を思い出した。黒のゴスロリ服を着込んだ姿を。

「コツコツと薄暗い廊下に足音が響いている。音源は、何かを考えている女性である。

彼女は部屋を出てから、アリアをどうやってマスターとして契約させたか考えていた。

「あらっ？ その表情は駄目だったみたいね」

「ベアト」「

女性の前に現れたのは、ベアトと呼ばれた20代後半の白衣を着た女性であった。

ベアトの姿を見た女性は、思案する表情から嫌なものを見る表情へと変わる。

「駄目よ？ 現“マスター”をそんな表情で見ちや

「…………」

女性は、ベアトの注意を無視して彼女の脇を通る。
その姿を一瞥したベアトは、通り過ぎた女性に語りかけた。

「マスターであるベアトリクス・リヒテンシュタインが命ずる。今夜、アリア・リヒテンシュタインと契約を結び、新たなマスターにせよ。そして、私に見せなさいな。我が娘の才能の片鱗を……」

ベアトの命令にて、女性は足を止めて臣下の礼をとる。苦々しい想いを内に秘めて。

深夜、寝静まつた部屋に白銀の頂点に円を持つ正三角形の魔法陣が展開し、漆黒の髪を持つ女性が現れた。

女性は、この部屋に置いてあるベッドまで歩み寄り、ベッドを覗く。そこには、毛布を纏つて眠る9歳ほどの少女がいた。彼女は相当疲れているのか、身じろきせず深い眠りの中にいるようであった。ベッドの脇には、黒のゴスロリ服が綺麗に置まれている。

女性は蒼い瞳で少女を見ると、彼女の上に跨がった。

「ん……」

少女は体に掛かる重さに対し、身をよじることで抵抗するが、目を覚ますことはなかつた。

女性は目覚める気配がないとわかると、先程と同じ魔法陣を展開する。

「現マスター、ベアトリクス・リヒテンシュタインとの契約を破棄し、アリア・リヒテンシュタインを新たなマスターとして契約します」

女性の機械的な言葉に反応するよつこ、魔法陣の輝きが増す。彼女の言葉は続く。

「契約に伴い、アリア・リヒテンシュタインのリンクカード露出。白夜の書によるリンクカードア蒐集。白夜の書のマスター契約を開始します」

女性の手元に鉄色の魔導書が現れ、少女 アリア・リヒテンシ

ユタインの胸から淡い灰色のリンカーコアが浮かび上がる。

女性は彼女のリンカーコアの前に、白紙のページを開いた白夜の魔導書をかざす。

「蒐集開始」

女性の呟きを合図に、白紙のページがどんどん文字で埋め尽くされていく。ページが埋まるに従つて、アリアのリンカーコアは次第に小さくなつた。

「くつ……あうつ……！」

リンカーコアの蒐集には痛みが伴うのか、呻き声をあげるアリア。ページがある程度埋まると、女性はアリアのリンカーコアの蒐集をやめる。小さくなつたリンカーコアはアリアのもとへと戻つた。

「仮契約完了。維持システムならびに防御プログラムが使用できます」

女性はそう告げると、黒猫に変化して変移魔法によつて退出した。部屋にはリンカーコアの蒐集により気絶したアリアだけが残された。

第4話（後書き）

以上で、第4話をお届けします。

アニメ2話のジュノルシードを封印したあとに起きた、アリアのイベントです。今回のお話は、前回でてきた魔導書の簡単な説明とちよつとしたオリジナル要素となります。

アリアが黒の髪を持つ女性と出会いつて数日たつた週末。その間、アリアは無事に家に送り帰されていた。

帰ったその日から、気持ちの整理をするために学校を休み、殆ど一緒にいるニアを相手に色々と語り掛けていた。おかげで、『魔法という異質な力がある』というものを受け入れる事が出来た。

「あつ……。高町さん達との約束の時間……」

前日の土曜日、なのはから父親の土郎がオーナーを務めるサッカーチームの試合のお誘いをメールで受けていた。メールの追伸部分で、この間の神社の出来事についてユーノ君と3人でお話しがしたいと記されていた。

アリアは、女性の話をなのは達がどう判断するか知りたかったのと、しばらく会えなかつた友達と話しがしたかつたので、その誘いを受けることにした。

「大人しくしててね。ニア」

「ニヤフ」

準備ができたアリアは寄ってきたニアの頭を撫でる。ニアは気持ち良さそうに目を瞑り、されるがまま撫でられた。

「こつてきます」

ある程度満足したアリアは、ニアに手を振つてなのは達との待ち合わせ場所にむかった。

「頑張れ頑張れ！」

「頑張つて～」

高町士郎がオーナー兼コーチを務めるサッカーチーム『翠屋FC』の試合が始まった。

アリサとすずかは声を張り上げて必死に応援、なのはとアリアは静かに応援している。

【これって、こいつの世界のスポーツなんだよね】

【うん。 そうだよ。 サッカーつてこうの】

なのはとコニーは、念話で会話をしている。その内容がアリアに届いているので、特定の相手向けたものではないようである。

翠屋FC側のフォワードが得点を入れ、チームメイトとアリサ達は歓声を上げる。

【ボールを足で蹴つて、相手のゴールに入れたらーよ。 手を使っていいのは、ゴールの前にいる人だけで……】

【へえ～、面白そうだね】

(スクライア君、興味あるんだ……)

2人の念話を聞きながら、アリアは試合を観戦する。

「キーパーすゞーい

「ほんとほんと」

「かつこいこいね」

相手チームのフォワードが放ったボールが、翠屋JFCのディフェンスの頭を越えた。が、キーパーの好プレーに阻まれた。そのプレーに再び歓声が挙がる。

【ユーノ君の世界は、こいついうスポーツとかあるの?】

【あるよ。僕は研究と発掘ばかりで、あまりやってなかつたけど
……】

【いやほほ。私と一緒にだ。スポーツはちょっと苦手……】

2人の会話に思わず笑ってしまうアリア。その姿を見たすすかに、「どうしたの?」と訊ねられたがなんでもないと首を横に振り、視線をグラウンドに移した。

試合は2-0で翠屋JFCが勝利した。お祝いに翠屋で祝勝会が

行われる事となり、アリア達4人も翠屋で昼食を取ることになった。

「それにしても、改めて見ると何か、この子フレットとちよつと違わない？」

「そういえばそつかな。動物病院の医院長先生も『かわった子だね』って言つてたし……」

食事が一段落し、デザートのケーキを楽しんでいた時、テーブルにいたコーノを見て、アリサがふとその姿に疑問を抱き、すずかも同じ事を思つていたのか、アリサに同意した。

それを聞いたのはとアリアは、喋るフレットで魔法使いとは言えず、気まずい顔になる。

「あーええと……。まあ、ちょっと変わったフレットってことで……。ほりコーノ君、お手……」

「さゆ」

2人の疑問に苦しげに訳を言つなのは、コーノにお手をせせて注意をそらす。

「かわいい~」

「賢い賢い」

なのはの差し出した右手に左手をのせたコーノの姿にアリサは感嘆の声を上げ、すずかは手を前に組み感激していた。

撫で回されるコーノの姿に、なのはは念話で謝り、アリアは彼女らのやり取りを苦笑して見守っていた。

「はい！」

「じゃつ、みんな解散。気をつけ帰るんだぞ」

「ありがとうございました」

祝勝会が終わったのか、翠屋ＪＦＣのみんなが店から出てきた。アリアはなんとなく彼らを眺めていると、キーパーの少年がボストンバッグのポケットから何かを取り出し、ジャージのポケットに入れるのを目撃した。

「！」

なのはは何かを感じたのか、その少年の様子をじっと見た。

「どうかしたの？ 高町さん」

「あつ……うん。たぶん『氣のせい』かな？」

なのはは迷った表情で、アリアを見る。

「あの子なら、さりや」

「はい、なのは」

「へつ？」

「𠂇」𠂇」

アリアとなのはの会話に割り込む様に、アリサがなのはにコーンを返す。コーンは散々もみくちゃにされたのか、皿を回していた。

「さて、じゃあ私達も解散？」

「うん、そうだね」

「アーティストの心」

じょうど二〇一〇年になつた頃で、アリサの提案でお開きとなつた。

「」の後、みんなはそれぞれ用事がある。アリサは父親のデビット・バニングスと買い物、すずかは姉の月村忍とお出かけするらしい。アリアは、なのはと彼女の家でお話しの予定である。

「おっ、みんなも解散か？」

「あつ、お父さん」

席を立ち上がった時、子供達を見送った高町土郎が、なのは達の所にやって来た。

「今日はお誘い頂きました、ありがとうございました」

「ありがとうございました」

「試合かつこよかつたです」

士郎に対し、アリア達は今日のサッカーの試合や翠屋での食事のお礼を言った。彼は3人を送りつかと聞くが、アリサとすずかはお迎えが来ることを告げた。

「アリアちゃんはどうするんだい？」

「た……なのはさんに聞きたい事があるので、大丈夫です」

「アリア、なのはに聞きたい事つて？」

「理数系でちょっとわかんない事があつて……」

「そつか。確かにアリアちゃん、ちょっと苦手だもんね」

「あははは……」

アリアは、予め準備していた言葉で追及を逃れる。
その答えに納得したのか、アリサとすずかは士郎に一礼して翠屋を後にし、なのはとアリアは士郎と一緒に高町家へ向かった。

高町家へ到着したなのは・ユーノ・アリアだったが、なのは自分がベッドに疲れた様子で倒れ込む。それに驚いたアリアだったが、ユーノの説明になんとか落ち着きを取り戻した。

「僕がもつとしつかりしていれば……」

「ユーノ君は必死にサポート頑張ってるんでしょ？」

ユーノの自分を責める呟きに言葉が見つからないアリアは、彼を慰めることしかできなかつた。

「重苦しい雰囲気にしちゃつて」めんアリア。それより話つてなに？」

ユーノは雰囲気を切り替えようと、アリアの相談内容を尋ねる。アリアはユーノの正面に座り、1週間前にあつた神社での出来事を話したいと口を開いた。ジュエルシードで変化した犬に追いかけ回された事、自分が死ぬと確信した時に黒猫が助けてくれた事、黒猫から渡された鉄色の分厚い本で対抗できた事を話した。その間、ユーノは口を挟まずに話を黙つて聞いていた。

「アリアは黒猫の正体とか、その魔導書の正体とかわかる？」

「えつと……。後でその黒猫に説明されたけど、魔導書は“白夜の魔導書”っていうので、様々な武器を集める為に造られた魔導書であり、私の家系が管理してきたって。で、その黒猫は管制人格とかなんとか……」

アリアは、女性 黒猫 「特に口止めをされていなかつたので、ユーノに自分が知つた情報を話した。

ユーノは情報を整理しているようで、眉を寄せてアリアに続きを話すよう促す。

「魔導書には、剣とか槍とかの武器の使い方が記されてて、魔導書

を使うには“契約”が「

アリアは、またキンインという金属音を耳にした。そして、2度ほど感じた魔力反応に気づいた。

「ユーノ君、アリアちゃん！？」

なのはも感じたのか、畢竟めており、机に置いているレイジングハートを掴んだ。

「待つて！ 高町さん、ユーノ君…… 何も出来ないかも知れないけど、私も連れて行つて！？」

「えつ…… ー？」

「危険だよアリア！ 神社での時みたいな可能性がある…… それに、話しを聞いたような都合の良い事は何度も起こらないよ！？」

部屋を出ようとしたのはとユーノに対して、アリアは連れて行つてとお願いをした。

彼女の提案には驚き、ユーノは頑なに反対する。しかし、アリアはユーノに「大丈夫」と言い張り、必死に同行を求めた。

「アリアちゃん……。神社で追い掛けられたとき、怖くなかったの？」

「……うん。とても怖かった」

アリアの様子を見かねたのは、彼女が同行を諦める様に説得

する。しかし、アリアは意見を変える気配はなかつた。

「なのは……アリアを連れていい。これ以上封印の対応が遅れるのはは、流石にまずいよ」

「うん。アリアちゃん、無茶しちゃダメだめだよ？」

ジユエルシードの反応があつてから10分が経過していた。いち早く暴走を止めるため、コーノはアリアの同行を許可せざるを得なかつた。

なのははそれに頷くと、アリアに無茶しない様に釘をさした。アリアは首を縦に振り、なのはとコーノの後に付いて行つた。

第5話（後書き）

以上で、第5話をお届けします。

今回のお話は、サッカーの応援の回とジュエルシード暴走の前ふりです。

ちょっと無理やり感があると思いますが、そこはご容赦ねがいます。こうしないと魔法が使えない主人公の場面がないんです。

第6話

「レイジングハート、お願ひ！」

『Stand by Ready · set up』

ジュエルシードの発動状況を確認するために、3人は近くのビルの屋上にやつて来た。到着した時、なのははレイジングハートを発動し、バリアジャケットと杖状のレイジングハートを装備した。

「酷い……」

「えつ……」

ビルの屋上から見える景色は、大きな木々の幹であった。その姿に、なのはとアリアは絶句する。

「たぶん、人間が発動させちゃったんだ……。強い想いを持つた者が願いを込めて発動させた時、ジュエルシードは一番強い力を發揮するから……」

「えつ！？」

ユーノの説明を聞いたアリアは、翠屋JFCゴールキーパーの少年がジュエルシードを持っていた事を思い出す。

(あの時、ちゃんと高町さんに伝えていれば……)

少年が一緒にいた少女にジュエルシードを渡したと推測したアリアは、なのはとユーノにそれを伝えれなかつた事を後悔した。

ふと、隣にいるなのはを見ると、悲しそうにうつむいている姿があつた。その姿から、なのはも少年がジュエルシードを持っていた事に気づいていた様であった。

「ユーノ君……、」んな時はどうしたらいいの?」

「なのは?」

「高町さん?」

重苦しい沈黙の中、レイジングハートが淡い桜色に輝き、その変化にユーノとアリアは戸惑つ。

「ユーノ君!」

戸惑つているユーノに、なのははどうすればいいかを強い口調で訊ねた。

「うん……。封印するには接近しないと駄目だ……。まずは元となつている部分を見つけないと」

「でも、範囲が広いから手がつけられない……」

ユーノの助言に、アリアは悔しそうに呟いた。

屋上から見える範囲では、あちらこちらに巨大な木が生えているため、搜索の難しさが簡単に予想できる。

「大丈夫だよ、アリアちゃん。私が見つけるから」

「高町さん……。歩いて探すの？ 無茶だよー」

「大丈夫！」

アリアの言葉を否定する様にレイジングハートを力強く前に構えるのは。

『Area Search』

「リリカルマジカル。探して、災厄の根源を」

なのはが呪文を唱えると、彼女の足元に魔法陣が現れた。そこから、多数の小型スフィアが解き放たれてジュエルシードを探すため散開した。

「見つけた！」

暫く目を瞑っていたなのは、ジュエルシードを発見する。

「すぐ封印するから！」

「ここからじゃ無理だよー 近づかなきや」

「できるよー 大丈夫」

早速封印しようとするなのはに、ユーノは遠距離からの封印は無理と言つたが、自信に満ちた声で答えた。

「そうだよね？ レイジングハート」

『Shooting Mode · Set up』

なのはの想いに応える様に、レイジングハートは形を三日月の杖の先を『フ』の字に変える。

「行つて、捕まえて」

なのはの掛け声とともに、環状魔法陣を纏ったレイジングハートは、スフィアをジュエルシードのある木に向けて発射した。

『Stand by Ready』

「リリカルマジカル。ジュエルシードシリアル10、封印！」

なのはは、ジュエルシードを封印する呪文を唱えた。再び、レイジングハートから砲撃が放たれ、ジュエルシードに命中する。

『Seeling』

ジュエルシードが封印されると木々は消滅し、根による地面の隆起だけが残つた。

『Receipt Number X』

封印されたジュエルシードがレイジングハートの元に收められ、今回の出来事は終息した。

「色んな人に迷惑……掛けちゃつたね」

バリアジャケットを解除したのは、今回の出来事が悔しいのかその場に蹲る。

「私、気づいてたんだ……。あの子が持っているの。でも、気のせいだつて思っちゃった」

「高町さんだけのせいじゃないよ……。私は、その子が鞄からジュー
エルシードを出したのを見ていたのに、2人に知らせる事ができなかつたから……」

なのはの罪悪感に満ちた告白に、アリアは胸が搔きむしられる思いだつた。

「お願い。2人とも悲しい顔をしないで……。もともとは僕が原因なんだから……」

なのはとアリアの2人は、今回の出来事に胸を痛めて帰宅の途に着いた。新たな決意をそれぞれの胸に秘めて。

第6話（後書き）

あとがき

以上で第6話をお送りします。ぶっちやけ、アリアが空氣です。
まあ、魔法が使えないでの、空氣なのは仕方がありませんが……。

次回から原作を離れていくかもです。アニメ第4話はフェイトが
出でますが、どういう風に絡めていけばいいか……。

第7話

ジュエルシードが海鳴市に被害をもたらした日の夜。

アリアは、布団の中で今日の出来事を考えていた。ジュエルシードを事前に見つけていたにも関わらず見逃した事、ジュエルシードが発動した時に何も出来ずにただ見ているだけだった事を。

(高町さんとコーノ君の役に立ちたい……。もしも、またあの女性に会えないかな？あの時、断ったのは駄目だつたかな……)

アリアは、白夜の魔導書を持っていた女性を思い浮かべていた。彼女からの提案を受けたのを後悔していた。魔導書の力で少しは負担を自分も背負えるのではないかと考えていた。

(でも、過ぎた事だよね……)

過去には戻ないので、過ぎた事は忘れ明日に備えようと、アリアは目を瞑る。

【今日の事件は堪えたようね？ アリア・リヒテンシュタイン】

「…………」

聴こえたのは、先程会いたいと思っていた声であり、アリアは布団を跳ね上げて起きる。それから自分の部屋を見回すが、脇には眠っているニアしか居ない。

「ビ、ビリヒーいるんですか？」

【貴女の家の前よ。着替えて降りてらっしゃい。お話があるわ】
アリアは言われた通りに、薄い桃色のパジャマから鼠色のワンピースに着替えて、玄関に向かつた。

「久しぶりかしら。アリア・リヒテンシュタイン」

「あつ、はい。お久しぶりです……」

玄関の扉を開けると、黒のスーツを着た女性がいた。白夜の魔導書の説明をした女性である。

「あの……、お話つて？」

「貴女が断つた“白夜の魔導書”について」

「えつ……」

女性が訪れた理由を聞いたアリアは、目を見開いた。それは、自分が求めた高町なのはを手伝える力、白夜の魔導書についてだった。

「あの……どこに向かっているんですか？」

「…………」

「あの……」

「黙つてついてらっしゃい」

アリアはあの後、転移魔法によつて前回訪れた建物に招かれた。その建物は、紅い煉瓦造りの洋館で、薦が所々に巻き付いており、妖しい雰囲気を醸し出していた。

（この洋館つて確かに幽霊が出るつて去年噂になつた……）

アリアは、洋館に入る時に見た町並みの景色から海鳴市郊外であると確認し、建物の外観を見た時に男子が幽霊が出ると噂にしていたのを思い出した。

（私、幽霊が何かに取りつかれるのかな……）

アリアは背筋に悪寒が走り、湧いてきた恐怖を振り払おうと歩く速度を上げた。

「着いたわ

「ふぎゅ

「…………」

「すみばせん」

アリアが歩く速度を上げた時に、女性が重厚な扉の前で止まつた為に彼女にぶつかる事になった。女性はそんなアリアを呆れた目で見た。アリアは鼻をぶつけたのか、鼻を押さえてこもつた声で女性に謝った。

「…………。貴女には今から会つてもらいたい人がいるわ」

「はい」

「失礼のないよう」

女性は、アリアに注意事項を述べると扉を3度叩く。そして「失礼します」と断つて中に入る。

「アリア・リヒテンシュタインを連れてきました」

「（）話勞様。お茶の用意をお願い」

「…………かしこまりました。直ぐに（）用意いたします」

女性は部屋の主に報告を済ますと、お茶の用意のために下がる。入れ替わるように、アリアは部屋に入った。

部屋には、本棚と机が置かれていた。本棚は机を中心に3方にあり、1つの本棚に様々な本が収められており、10段もの段数を構成している。机は扉の正面にあり、上等な木を素材にしていくようである。机は紙束と本の山が形成されていて、部屋の主の姿は見え

なかつた。

(さつきの声は……お母さん?)

しかし、アリアは先程の会話から、主が誰か予想できていた。あまり顔を見ない人の姿を。

第7話（後書き）

あとがき

以上で第7話をお届けします。これから少しづつオリジナルの展開をしつつ、進めていこうと思います。

まあ、アリアが魔法に目覚めないことには物語が進まないのですが……。

アリアを案内した女性が退室した室内には、アリアと部屋の主だけになつた。

「扉の前で立ち尽くさないで」口にこらつしゃい、アリア「

書類と本に埋もれた机からは、女性の声がした。アリアを気遣つてか、椅子から立ち上がって彼女の前に立つ。

「お、……かあさん？」

アリアの前に姿を見せた女性は、20代後半で艶のある銀の髪をたなびかせ、笑顔でアリアを迎えていた。

アリアは彼女を信じられないという表情だったが、だんだんと田元から涙が流れ出し、女性の胸元に駆け出した。

「アリア、寂しい思いをさせてごめんなさい」

アリアの母親は、胸元にうずくまつて嗚咽を洟らして泣いているアリアの背中をあやす様にゆっくり叩き、彼女が泣き止むまで待つた。

アリアはしばらく寂しさから泣いていたが、大分落ち着いたのか母親の胸元から離れ、涙の跡を残したまま満面な笑顔で母親を見上げた。母親は彼女の灰色の髪を撫で、安心した表情で娘の顔を見つめていた。

「失礼します。お茶の『用意ができました』

「『苦勞様』アリアを案内して。少し片付けをしてから向かうわ。アリア、積もる話しあはお茶を飲みながらにしましょ？？」

「かしこまりました。アリアお嬢様、『ご案内いたします』

親子の再会が丁度終わつた所に、アリアを連れてきた女性がメイド服を来て2人の元へ報告に訪れた。彼女は母親の指示の通りにアリアを連れて、書斎を退室した。

アリアの母親は2人を見送ると、机の書類の山から一冊の本を抜き出した。本の表紙は鉄色で、題名や著者は記されていない本である。

母親はその本と数枚の紙を抜いて、通信装置を引き出しから取り出し、何処かへと通信を繋げる。

「元気についてますか？ プレシア先輩」

『貴女には元気に見えるみたいね。ベアトリクス・リヒテンシュタイン。私は暇じゃないの』

通信が繋がった相手は紫色の髪を伸ばし、髪と同色のゆつたりした服を着た女性であった。アリアの母親 ベアトリクス・リヒテンシュタインの皮肉を受け流す表情には、疲労の色が濃く見受けられた。

「思った成果が出てない貴女に朗報があります。次元干渉型ロストロギア“ジュエルシード”。あれが発掘されました」

ベアトリクスは、何でもないよつにジュエルシードの件について、プレシアといつ名の紫の女性に話す。

プレシアは、その話を聞くと目を見開いて驚き、言葉が出てこないようである。そんな彼女の様子を気にせず、ベアトリクスは話を続ける。

「スクライア族の子供が担当した遺跡で発見されました。確保しようと本局へ輸送中の船を襲撃したのですけど、こちらの不手際で落としちゃいまして……」

平常と輸送艦の襲撃について話したベアトリクスに、プレシアは慌てた様子で彼女の行為を注意する。

『つーー！ そんなことをしたら管理局が黙つて』

「大丈夫です。輸送艦の動力炉を撃ち抜いて撃沈しましたし、原因不明の事故で片付くように手配済みです」

『そつ……。肝心のジュエルシードは？』

「第97管理外世界『地球』海鳴市。そこに落下しました。現在、

発掘責任者だったスクライア族の子供が回収中です

ベアトリクスは、通信前に抜き出した書類の一枚を読み上げる。その書類は、ジュエルシードに関する事が大まかに記されていた。総数や解放の手順、誤った使い方による被害予測など様々な文献を調べた内容が記されていた。

「ジュエルシードの総数は文献通り21個となります。スクライア族の子供が幾つ回収したのかは、まだ解りませんが、早めに集める事をお勧めしますよ?」

『…………何が言いたいの?』

「別に何も? 尊敬する先輩に有益な情報だと思つてお伝えしてだけです。他意はありません」

『怪しいわね。ジュエルシードを移送する船を襲撃、管理局が介入しにくる管理外世界に落下させ、自分で回収しようとせずに私に知らせる……。お膳立てが出来てるこの状況で、私が誘いに乗るとでも?』

プレシアは、ベアトリクスの報告に怪訝な表情を浮かべ、警戒感のある眼差しを向ける。

「そんなに疑うなら、私に監視を付けますか?」

『…………私の所に来なさい。座標はあとで知らせるわ。妙な真似をしたら承知しないわよ?』

「安心してください。裏切りはしません。寧ろ全力でサポートしま

すから」

ベアトリクスは、プレシアの警告に穏やかな笑みで応える。警告を発した本人は、その態度が気にくわないのか乱暴に通信を切った。

「アルハザード……。興味がない人はいませんよ？」 プレシア・テ
スタロッサ先輩」

ベアトリクスは、通信が切れた空間を見つめてそう呟いた。その表情は、不気味な笑みを浮かべていた。

ベアトリクスがいる書斎を退室したアリアは、メイドの女性の案内で応接間に歩を進めていた。廊下には、ふかふかの絨毯が敷かれしており、高価な花瓶や絵画が所々に壁に飾られている。

（私の家ってお金持ちだったんだ……）

アリアは、周囲に視線を向けながら、自分の家の金銭事情に驚いていた。

「こちらです。アリアお嬢様」

書斎の扉より少し大きい扉に到着した。アリアは、書斎に入る前の惨事になる一歩手前で踏み留まる。

（危なかつた……。あの変な絵を見ていたら、またぶつかつてた……）

アリアは、女性の後ろに飾られている四角や三角の幾何学模様に赤色や黄色の色彩のある絵を見る前に、彼女が立ち止まつた事に気づき、内心冷や汗を流していた。

応接間に足を踏み入れたアリアは目を凝つた。床は高級な絨毯が敷かれており、艶のある木のテーブルには高級な紅茶のカップと銀のポットが置かれている。

ソファは本革の革張りで、2人用がテーブルを挟んで対面するようにならって置かれていた。

「席にお付きください。直ぐにベアトリクス様も到着されますので」

メイドの女性はそう言つと、応接間の扉を閉じて退室する。

「えつと……。 いただきます?」

アリアはソファに座り、お皿に乗つてゐるクッキーを遠慮がちに食べ始めた。

第8話（後書き）

あとがき

以上で第8話をお送りします。

親子の感動の再会の内容が薄い……。あとで『お話』って言つても、もうちょっと内容があつてもいいんじゃないかなーと思つのですが。ちょくちょく修正していく方針とします。

で、反対の暗躍の部分はすらすらと書けたのですが……。たしか、ジユノルシードの輸送中の事故は原因不明だったような気がしたので、このうしではベアトリクスが犯人つて事で。

今回の話しが書き終わつてみると、原作の『PT事件』の名前が変わりそうな気配がががが。

「遅くなつてごめんね、アリア」

ベアトリクスが応接間に入つた時、アリアはソファの肘掛けに頭を乗せて眠つていた。その光景を見たベアトリクスは、「あらあら」と呟き、腕時計で現在の時間を確認した。

「もうこんな時間……。小学生には辛い時間よね……」

現在の時間は深夜の1時。小学生が起きている時間ではない。

ベアトリクスは、念話でアリアを連れてきた女性に就寝の準備をする様に伝えると、娘を抱き上げる。

「すやすや寝ちゃつて……。可愛いわね」

ベアトリクスは、腕の中で眠る娘の表情を見ながら意味深な言葉を紡ぐ。彼女が住むこの洋館は殆ど無人であるため、聞く人はいい。い。

「機は熟したわ。第1級搜索指定ロストロギア『白夜の書』と私の研究の成果がどういつた出来事をもたらすのか……。失敗すれば未来は終わり、成功すれば未来は開かれる……。それは、貴女次第よ？」アリア

彼女は娘の頬にかかる髪を払いながら応接間を退室し、準備が出来たと念話で連絡があつた寝室へ歩を進める。廊下には、これから

起じる出来事が楽しみなのか、ベアトリクスの薄ら笑いが響いていた。

(そこにはるのは誰?)

アリアは、ぼんやりとする意識の中、感じる視線のもとを探る為に周りを見渡す。しかし、周りは暖かな光があるので、彼女以外に人の姿はなかった。

『』

(何て言つてるの?)

アリアは空間に声が響いたのを感じ、眠氣からか薄れゆく意識を必死に繋ぎ止めながら、その言葉を聞き取ろうとする。

『』

(よく聞き取れないや……)

意識がはつきりしないためか、声は聞こえても言葉として認識しない自分に、アリアは少し歯痒い思いが募る。

『』

また声が空間に響くが、アリアはその言葉を認識できない。

彼女は、その状況を少しでも好転させようと足搔ぐ。意識をはつきりさせるため、ほつぺたをつねるのと手を田の前に持つて来た時、自分の手が透けている事に驚愕した。慌てて体を確かめると全身が透けている。

(えつ？　ええつ？)

自分の体の異常を感じた事で、ぽんやりとした視界と意識ははつきりとし、先程から聞こえる声が言葉として認識される。

『起きなさい。アリア・リヒテンシュタイン』

アリアの耳に馴染みのある声が聞こえた。それは、1週間前のジユエルシードによつて変化した犬の化け物に襲われた時に、アリアに魔法の世界の片鱗を見せた時に、そして母親との再会のきっかけになつた声であつた。

「あのつー...リヒテンビヒですか？」

アリアは、声の主である女性の姿を脳裏に浮かべながら、彼女に聞こえる様に大声で呼びかける。

『リヒテは白夜の書の内部空間よ』

「白夜の書の……内部空間？」

『そつよ。白夜の書とその管制人格である私のマスターになる契約を結ぶ場所』

「ちょっと待つて！　私はマスターにならないって」

アリアは、女性の言葉を書き消す様に叫ぶ事で、決定済みの事象を否定したかつた。

『確かにあの時、貴女は断つた……。でも、今はこの力を欲しているのでしょうか？ 友達の高町なのはとゴーノ・スクライアを手伝えるこの力を』

「うう……」

女性の指摘に、アリアは言い淀む。彼女は、女性にもっと詳しく話を聞いて、メリットとデメリットをよく考え、マスターとして契約を結ぼうとしていた。

「……もし断つたら？」

『貴女はずつとこの空間に囚われる事になるわ。有り体に言えば死かしら？ 貴女が死ねば、お友達もベアトも悲しむわね』

アリアは、断つた時の処遇について訊ねた所、彼女が死ぬという結末を平然と女性は言い切る。アリアは、断ると死が待っている事について、ショックを受けたのかうつむいている。

「……何で私がマスターに選ばれたのか、白夜の書の詳しい事や貴女の事を教えてください。そうしたら、契約します！」

アリアは意思の籠つた目で虚空を睨み付ける。その目に何かを感じたのか、女性は突然笑い出した。

『流石、ベアトリクス・リヒテンシュタインの娘ね。その目が母親そつくり。貴女が選ばれた理由と白夜の書の事を話す前に、リ

ヒトン・シュタイン家の歴史を少し語りましょう。

そうして、女性は語り始めた。アリアの家系であるリヒテンシュタイン家の歴史を。そして、アリアが選ばれた理由と白夜の書の秘密を。

第9話（後書き）

以上で、第9話をお届けします。本来はもう少しあと長かったのですが、収集がつかなくなつたので、中途半端な所で切る形になつてしましました。

今回の、アリアと女性のやり取りがすごい微妙な感じがしてならないです。全体的に押しが弱いのかなーと考えているのですが、どうでしょうか？

次回は、白夜の書とか色々な秘密がどばどばと、出できますのでよろしくお願いします。

『リヒテンシュタイン家はね、この世界とは別の世界の魔力量が多いだけの王家だった。その世界では、争いが比較的少ない平和な世界だった。ある日から、その世界で戦争が起こったわ。戦争の原因はテロを発端とした領土戦争。リヒテンシュタイン王家は、辺境の貧しい領土だったためにあまり相手にされなかつたけれど、戦争で生き残るために試行錯誤を繰り返したわ』

女性は優しく語りかけるように、リヒテンシュタイン家の歴史を話し始めた。

彼女の説明とともに、アリアがいる空間が変化する。ゆつたりとした服装の人々が、王宮と思われる大理石調の建物の中を右往左往していたり、町が炎に包まれる映像が流れる。

『その世界での主力は、魔法ではなく質量兵器だった。魔法文化はある程度、発展していたけれど、スイッチ一つで相手を葬れる兵器には勝てなつたわ。リヒテンシュタイン家は衰退期に入つていたから、大量に質量兵器を入手しても維持するほどのお金は持つていなかつた……。そこで、自分達の膨大な魔力を使つた質量兵器の製造を試みたけど、結果は失敗』

大量の大陸間弾道弾ミサイルが打ち上げられる映像や多数の戦車が町を蹂躪する映像に変化する。

『原因は、理論が無謀なため。仕組みが全然違つから当たり前の

だけれど……。でも意地があつたのでしょうね……、理論を改良したり最初から考えた結果、兵器や武器を記録してその記録を元に魔力でそれらを再構成できるデバイスを作り出す事に成功した……。
それが白夜の書』

『白夜の書』

頭を悩ませる何人かの男性陣の映像が流れた後、映像は停止し、アリアの目の前に空色の魔導書が出現する。

女性は再び話し始め、アリアは映像を見ながら、彼女の話に静かに耳を傾ける。

『完成した白夜の書を喜んだリヒテンシュタイン家だつたけれど、直ぐに落胆する事になつたわ』

彼女は、溜め息混じりに間を取るように話を区切る。

『白夜の書は、当初の数倍の資金を注ぎ込んだにも関わらず、あまり使い物にならない代物だつたわ。起動には成功するけれど、魔力による再構成の段階で機能停止に陥り、使用者には重度の障害が残る事がわかつたの』

映像が再び流れ出す。その映像は、空色の魔導書を持った男性が、オレンジ色の魔法陣を展開するが、直後にその魔法陣が消滅、意識を失い倒れるものだった。

『この欠陥は深刻だつたわ。使用するには、人間が扱える情報処理能力を遥かに上回つていたわ。なんとか、扱える様にしようとインテリジェントデバイス化しても、組み込めるスペースが少なく処理速度の低下により、さらに使えない代物になる事が解つていたから、開発は暗礁に乗り上げたわ』

女性の話が一旦終わった所で映像が消え、再び暖かな光が空間に満ちる。

「ここまでが、リヒテンシュタイン家の歴史と白夜の書について。理解したかしら？」

女性は、アリアの背後に現れ、彼女を優しく背後から抱き、物語の終了と質問がないかどうかを耳元で囁く声で投げ掛けた。

「ふえっ！？」

アリアは、いきなり後ろから重さを感じた事に対する驚きと耳元で囁く声がくすぐったいのが合わさり、奇妙な声を上げた。

女性は、その反応を楽しむとアリアを解放し、彼女を振り向かせる。

「ここまでのお話は、理解できたかしら？ アリア・リヒテンシュタイン」

女性は、再び同じ問い合わせアリアに問う。

(えっと……。理解できたのかな?)

アリアは、女性の綺麗な蒼い瞳に吸い込まれる錯覚を覚える中、語られた自分の家系と白夜の書の物語を思い出す。

（私は、別の世界の人間で、その世界の王様の末裔ってことでいいのかな？ それで白夜の書は、私のご先祖様が作ったデバイス？ 仕組みとかよく解らなかつたけど……）

彼女は、色々な話と映像を思い出しながら、どうにか理解した。

「は、はい……。私の家は、別の世界の王様の家系で、その人たちが白夜の書を作つたでいいんですね？」

「ええ」

女性の領きに、アリアはよく解らない単語や概念がある中、ちゃんと理解できるか不安だったが、理解できた事に安堵する。しかし、肝心の目の前の女性について何一つ解つてない事に、アリアは気づく。

「えっと……。まだ貴女について管制人格つて事しか解らないんですけど……。あと、管制人格つてなんですか？」

「管制人格 私は、簡単に言えば、魔導書に記録された膨大な魔法を管理・運用するために造られたの。これは別の魔法技術なのだけれど。契約だけれど、魔導書の起動と貴女が私に新たな名前を与えるだけ」

アリアは、おずおずと目の前の女性が言った“管制人格”について質問し、それに対して、女性は前回説明した事ととして変わらない内容の説明をした。

「他に質問は？」

「お話の中であつた欠陥は、解消されたんですか？」

「ええ。使用した段階で機能停止に陥つた欠陥は、別世界の魔法技術を導入する事である程度解消されたわ」

「ある程度？」

「使用の魔力によって使用できる魔法を制限する事でね。あと、私が微調整して解決。他には？」

「えと」「

アリアは、解らない事を女性に何度も質問し、必死に不安を打ち消そうとした。

「質問は以上？」

「はい」

「納得したかしら？」

「えつと……はい」

「約束通り、契約を結んでくれる？」

「……はい、受けます」

アリアは、不安や疑問に思つていた事を女性に質問し続けた。そして、だいたい質問が終わった時に、アリアは女性に再び契約を持ちかけられ、納得していたアリアは、その誘いを受ける。

「良かったわ。これで『受けない』って答えたなら、悲しいもの」

女性は、アリアが白夜の書の契約に応じる事に安心した様で、アリアの灰色の髪を撫でながら、微笑む。

「それじゃあ、儀式を始めるわ。私の後に続いて呪文を唱えて」

「はい」

アリアは、女性の注意事項に不安な表情で返事をする。

「永劫の時を巡りし魔導書。旧き導き手の元、新たな導き手に永久の道を」

「永劫の時を巡りし魔導書。旧き導き手の元、新たな導き手に永久の道を」

2人の間に、出現していた白夜の書が中空に浮遊していた。女性の詠唱に合わせる様に、表紙の色を空色から夕焼けの色、夜の色、朝焼けの色へと変わる。

「古からの加護を新しき導き手の元へ

「古からの加護を新しき導き手の元へ」

白夜の書の表紙がアリアの前で開き、ページが勝手に捲れ続ける。そして、あるページで止まった。

そのページは、解読不能の文字で埋め尽くされており、文字も表紙の発光に呼応するかの様に淡い灰色に発光していた。

「契約のもと、その力を解き放て」

「契約のもと、その力を解き放て」

アリアは、女性の後に続く様に呪文を唱える。始めはたどたどしく詠唱していたが、後半は力強く詠唱していた。

『白夜の書、セットアップ！』

セットアップの掛け声により、白夜の魔導書とアリア、女性が淡い灰色に包まれた。

アリアはその光景に戸惑い、おろおろとする。

「落ち着きなさい。怖がる事はないわ」

そんなアリアを安心させるためか、女性はギュッと抱き締めて、彼女を安心させようとした。

「安心したかしら？」

「はい」

「じゃあ、儀式の仕上げをしましょう。心を澄ませなさい。呪文が

浮かぶはずよ

アリアは、言われた通りに田を開じ、心を澄ませる。

「主の名において汝に新たな名を贈る。導き駆り立てる女神、勝利のルーンに通じるもの、ブリュンヒルト」

アリアは閉じていた田を開き、右手で女性の頬に手を添えて、心中に浮かんだ言葉を紡ぐ。

女性は、片膝を地面につける臣下の礼を取り、アリアの言葉に耳に傾けた。

「ブリュンヒルト、承認します」

ブリュンヒルトの声とともに、空間に由に近い灰色の光が満ちる。アリアは、眩しさに我慢出来ず、目を閉じる。同時に、体が浮遊するのを感じると、今度は重力に引かれるように落下する。

「いや……」

アリアは、突然の落下に叫び声を上げるしかなかった。

第10話（後書き）

あとがき

以上で、第10話をお届けします。ここ最近更新が遅くすみません。白夜の書の設定に納得が出来ず、書き直してました。

アリアが魔導書を使うイメージを掲めようとアニメを見たりしてたんですけど、中々イメージが掴めません。ナンバーズにやられるアリアは、浮かんだんですが（笑）。

おかしい所があればご指摘をお願いします。

海鳴市近辺のとあるビルの屋上に、月明かりに照らされた2つの影があった。2つに結んだ金の髪を風になびかせ、黒いレオタード風の服にピンク色の布がスカートの役割を果たしており、黒いマントを羽織っている。手には、同じく色の手袋をはめていた。その手には、黄色い宝石のような球体が填めこまれた斧のような物を持っている。

もう1つの影はオレンジの毛並みを持ち、額に紅い宝石がある大型の狼である。

「ロストロギアは、この付近にあるんだね。形体は蒼い宝石、一般呼称はジュエルシード」

少女は、呟く様に言葉を紡ぐと、目を瞑せた。

「やうだね。早く帰ろ」

少女がそう呟くと、控えていた狼が頷くように遠吠えをした。

アリアが、白夜の書とその管制人格ブリュンヒルトの主となつて1週間が経過した。

契約は、夢の事だと思っていたアリアだったが、朝日覚めると腕の中にいつの間にか白夜の書があった。そして、彼女を起こしに来

た人物がアリアの事を“マスター”と呼び、母親のベアトリクスから白夜の書と魔法の注意事項を聞かされた時に、自分が魔法使いになつたのだと実感した。

アリアは魔法使いとなつたと分かつた時、これで友達の探し物を手伝えると意気込み、母親に魔法を教えて貰えるよう事情を説明し、説得を行つた。

彼女は、元々教えるつもりだつたのか、一いつ返事で快諾した。それからは、ベアトリクスの休暇が終わる1週間の間、彼女と扱うデバイスの管制人格であるブリュンヒルトの指導のもと、魔導師としてのイロハと白夜の書の扱い方を教わつた。

そして週末。この日は、訓練をお休みさせてもらい、アリアは月村邸に向かつていた。最近、なのはの元気がない事を心配して、アリサとすずかがお茶会を開く事を決め、アリアも招待されていた。

月村邸へは、バスを使って向かう。最寄りのバス停からは、徒歩で直ぐの距離である。

月村邸へ到着し、インター ホンを鳴らすと、女性の声がインター ホン越しに聞こえた。

『はい。どちら様でしうか?』

「えと……、アリア・リヒテンシュタイン、です。月村すずかさん
に、今日のお茶会、お誘い頂きました」

アリアは緊張からか、言葉をつづかえながら、用件を伝えた。

「しばらくお待ちください」という返事があり、向こう側の気配が遠のいたのを、アリアは感じた。

「豪華な家ね」

アリアが返事を待つていると、背中に背負つているリュックがも

ぞもぞと動き、黒猫が顔を出した。

「ブレン。勝手に出てきちゃ駄目だよ」

「この黒猫は、1週間前に契約した白夜の書の管制人格であるブリュンヒルデが

猫の姿に魔法で擬態したものである。さらに彼女によると、家にいたニアという黒猫は、自分だと告白した。

その事に驚いたアリアは、翌朝の学校に行く準備のため、家に帰宅した時、ニアが居るか探したが、見つからなかつた。

学校から洋館に戻つた時に、ブリュンヒルデに何故ニアとして傍にいたのか理由を聞くと、母親であるベアトリクスの命令で代わりに見守つていたとの返事であつた。

その言葉に密かに捨てられたのではないかという思いが消え、大事にされていたんだという母親の想いに涙が溢れた。

【聞いてくるのかしら？】アリア。相手が困つているわ】

「えつー！？」

いつの間にか、アリアはボーッとしていた様で、インターホンから声に返事が出来ないでいた。

『アリアお嬢様、どうかいたしましたか？』

「いえ、何でもないです」

『すずかお嬢様たちは、外でお茶を召し上がっておられますので、そちらにお越しください。お飲み物は何にいたしましょう？』

「お任せします」

『かしこまりました。到着した頃にお持ちいたします』

インター ホンが切れると門扉が自動で開き、1人分のスペースのところで止まる。アリアがくぐると、今度は自動で閉じる。

「結構広いわね」

「せうだね。ここから屋敷まで距離がある家は珍しい」

リュックから出たブリュンヒルデはアリアの肩に移動し、屋敷の周りに広がっている木々を見て、その広さに感心する。

アリアも、ブリュンヒルデに相槌をうち、とりあえず屋敷へ行こうと足を踏み出した瞬間、久しぶりの感覚を感じた。

「えっ！？ ジュエルシード？」

「こんな所に落ちたのね。」

「ブレン、分かるの？」

「神社での出来事を忘れたかしら？ ジュエルシードの事はわかっているわ」

ブリュンヒルデは、アリアの肩から飛び降りる。そして、アリアに向き直り問い合わせた。

「高町なのはが心配？」

「うん。ゴーノ君がついているから大丈夫だとわかってるけど、心配」

「友達だから？」

「うん」

ブリュンヒルデの問い合わせに、アリアは元気よく頷く。

「案内するわ。魔法を使い始めて1週間なんだから、無茶しちゃダメよ？」

「うん！」

ブリュンヒルデの案内のあと、ジュエルシードの反応があつた場所に向かう途中で、景色が変わった。

「これって……」

「封時結界。ゼウス、あのフオレットが張つたよね」

結界の発動で、2人の足が止まる。さらに、青白い光がアリアの先から満ちる。

「くつ……ーっ！」

「あら？」

青白い光が収まると、そこには巨大な猫が佇んでいた。その姿に、呆気に取られるアリアと興味深げに見上げるブリュンヒルデ。

「ジュエルシードは、あのこから感じられるけど……」

「そうね。どうやら、今回の発動の元になつた願いは無害みたいね。危険はないわ」

「良かった」

ブリュンヒルデの分析に、アリアは安堵する。ジュエルシードの暴走体と対峙した事のあるアリアは、例え魔法があると言つてもあれは危険過ぎると感じていた。なので、アリアはジュエルシードの回収を手伝つているなのはが怪我をしないか、心配であった。

「今回の暴走は比較的安全でも、何が起こるかわからないわ。急ぐわよ」

アリアは、ブリュンヒルデとともに駆け出したとき、巨大な猫に黄色の光が当たつた。

「なに？」

その攻撃に何らかの効果が付加されているのか、猫はうめき声を上げる。

アリアは、訳が分からないといった表情を浮かべていた。多数の光が再び猫に襲いかかつた時、彼女は思わず駆け出していた。

「アリア、どうあるつもつ！？」

「あの猫を助け」

アリアはそう「ブリュンヒルデ」に言つた時、再び多数の黄色の光が猫に襲いかかる。

「――」

アリアは、猫に襲いかかる光を見て間に合わないとわかつていても、駆ける速度を上げる。

一緒に駆けていた「ブリュンヒルデ」は、再びアリアの肩に飛び乗り、離されないようにしています。

「アリア、よく猫を見なさい。あの攻撃は、貴女のお友達が防ぐわ」

ブリュンヒルデは、アリアの耳元で優しく語りかける。

アリアは言われた通りに猫を見ると、お馴染みの衣装を着た少女が猫の背中に乗り、攻撃を防いでいた。しかし黄色い光は、猫の足元に命中し、猫はバランスが崩れ倒れる。背中に乗っていたのは、ハラハラさせる動作でなんとか空中に避難し、ゆっくりと地面に降り立つた様である。

「あの光から推測すると、おそらく高町なのはと同じ魔導師ね……」

「そんなことわかるの?」

「ええ。私達やベアトリクス、高町なのはとコーノ以外に魔導師はないものの。新手の魔導師の目的は、ジュエルシードかしら?」

アリアの疑問に、ブリュンヒルデは淀みなく答える。その胸に新たに事態が動き出すと感じた。

「何度も言つようだけど、無理は禁物よ?」

「うう」

ブリュンヒルデの注意に、アリアは走りながら頷く。彼女らは、
ジュエルシードの元へ急いだ。

高町なのはは、田の前に立つ少女に戸惑っていた。彼女は、黒い
レオタードに黒いマントという衣装、長い金の髪を左右に結い、感
情が読み取れない瞳でなのはを見ていた。

なのはは、目の前の少女がジュエルシードで大きくなつた親友の
仔猫を攻撃した事を思い出し、レイジングハートを彼女に向ける。

「バルディッシュと同じインテリジョントデバイス。同系の魔導師

「バル……ディッシュ？」

金髪の少女は、なのはとレイジングハートを見て、呟くように言
う。

なのはは、彼女の言葉に反応し、右手に持つ黒い斧を見つめる。

「ロストロギア、ジュエルシード」

『Scythe forme・Set up.』

「申し訳ないけど…… いただいくべきます」

金髪の少女は、バルディッシュュの音声で斧から刃が魔力で構成された鎌を振り被つて、なのはに向かつて来た。

『Evasion・Flier fin.』

突然襲いかかる少女に、なのはは反応出来ない。危機を救つたのは、彼女の愛杖であるレイジングハートであった。

レイジングハートは、プログラムとして組み込まれている飛行魔法を発動し、空に飛び上がる事で、少女の攻撃を回避すると同時にいつたん距離を取る。

少女は、なのはの足元を狙つた攻撃が外れると、空中にいる彼女を一瞥し、バルディッシュュを中腰に構える。

『Are Saber.』

バルディッシュュの音声を合図に右下から左上に逆袈裟斬りの要領で振り抜く。魔力刃の部分がブーメランの様に回転しながら、なのはに襲いかかる。

「――」

『Protection.』

再び反応出来ないなのはに代わり、レイジングハートは防御魔法を発動し、主を守つた。

なのはの防御魔法に少女の攻撃が激突し、煙幕が上がる。なのはは、更に上に飛び事で抜け出すが、そこに少女が新たな魔法刃をだしたバルディッシュュを上に構えて振り被る。

「うう」

なのはは、レイジングハートをバルディッシュの魔力刃の根元に当たる様に構えて、攻撃を防いだ。

両者は、空中で睨み合つ。片方は未だ戸惑いの感情を瞳に宿し、もう片方は戸惑いなど瞳に全く宿していなかつた。

「なんで？ なんで急にこんな……」

「話しても……たぶん意味はない」

なのはの問いかけに、少女は拒絕の意を示した。
デバイスの鍔迫り合いをお互い止め、それぞれ地上に降り立つ。

『Device form.』

なのはは地面に、少女は枝の上に着地する。

少女のデバイスの音声が響き、鎌から斧の形態に再び変化する。

『Shooting form. Divine Buster Stand By.』

『Photon Lancer Get set.』

バルディッシュの変化に合わせて、レイジングハートも射撃形態に変化し、同時に射撃魔法の準備を完了させていつでも撃てる状態にする。

バルディッシュも射撃魔法の準備を完了させる。

「…………」

「…………」

なのはは、内心で少女の事を考えていた。自分と同じくらいの年齢、綺麗な瞳と髪。しかし、彼女が纏う雰囲気が気になつた。

しばらく睨み合いが続いていたが、少女の攻撃で気絶していたジユエルシード

で巨大化した仔猫が目を醒ます氣配を察したなのはは、様子を伺つために視線を少女から逸らした。

その隙を少女が見逃すはずがなく、電気を内部に秘めたスフィアでなのはを撃ち抜いた。

なのはは、少女の攻撃に反応出来なかつた。レイジングハートは攻撃魔法の準備をしていたため、防御魔法を展開する事が出来ない。無情にも、なのはは攻撃を受け、空に舞い上がつた。

「なのは…！」

近くで様子を見ていたコーノが駆け、なのはの落下地点までやつて来ると、彼女を受け止めるための魔法を発動し、なのはを無事に受け止めた。

一方の少女は、起き上がつた猫に対し、ジユエルシードの封印を行なつていた。

「ロストロギア、ジユエルシード……シリアル14。封印」

『Yes, sir.』

少女は、大規模な封印の術式を行使し、仔猫に宿ったジュエルシードを封印し、確保した。

その様子をユーノは、黙つて見ているしかなかった。

少女は、確保したジュエルシードをデバイスに収め、気絶しているのはを一瞥すると、マントを翻してその場を去った。

「高町さん！？　ユーノ君！？　ビニヒーいるの？」

「「」の声は……、アリア？」

少女が去った方向とは別の方向から、アリアが姿を現した。彼女は、なのはとユーノを捜している様であったが、なのはは気絶しており、ユーノはフェレットなので姿が見えにくい。

どうやって今いる場所まで誘導するかユーノは考えている時、アリアの声が頭に響いた。念話である。

【高町さん！？　ユーノ君！？　ビニヒーいるの！？】

ユーノは、何故アリアが念話を使えるかを考えた。だが、先に気絶しているなのはを助ける事を優先するため、あえて考えるのを放棄した。

彼は、慌てて現在いる場所と助けが必要であることをアリアに念話で伝えた。

助けが来るまでの間、同じ術式を使用してジュエルシードを回収していく黒衣の魔導師とアリアが念話を使えるようになっていた事について考え始めた。

「あの杖や衣装や魔法の使い方……。たぶん、うつむ……、間違いない彼女は僕と同じ世界の住人だ」

金髪の少女と邂逅した夜。寝間着姿のなのはと彼女の膝の上に座るフュレットのユーノは、反省会を行なっていた。

ユーノによると、今日出会った少女は彼と同じ世界からやって来たようである。

「……ジュエルシード集めをしてくるとあの子と……また、ぶつかっちゃうのかな」

なのはは、ユーノの説明に悲しみの表情を浮かべる。

そんな表情を見たユーノは、なのはに悲しい思いをさせた事に心を痛めた。

「ねえ、なのは……。もう遅いし、寝よっか」

「うん……。そうだね」

しばらく重い空気が部屋に漂っていた。その空氣に耐えられなかつたのか、ユーノはなのはに寝るように促した。彼女は、ユーノの言葉に従い、彼を机の上にある籠に連れていき、ベッドの中に入つた。

ユーノは、なのはがベッドに入るのを見つめながら、彼女の友達であるアリアについて考えていた。

アリアが接触の時に用いたのは、間違いない念話であつた。彼女には、念話の使い方を教えておらず、何故使えるのかが疑問であつた。

(考えられる可能性は、アリアと話した黒猫かな？もし、アリアが魔導師なら……。いいや駄目だ！只でさえ無関係ななのはを巻き込んでしまったんだ。例え魔法を使える様になつたとしても、これ以上アリアを巻き込めない）

ユーノは、アリアに協力を仰ぐか悩んだが、なのはをジュエルシード集めに巻き込んだ事を悔いていた。例え魔法を知り、使える可能性があるアリアに協力を仰ぐ事で、なのはの様に平穏を壊す事になると感じ、協力を仰ぐ考えを捨てた。

（……駄目だ、考えがまとまらない）

ユーノは、これから仕事を考え様としたが色々あつたため、寝る事にした。

「ねえ、ブレン」

「なにかしら？」

「明日、高町さんに告白する」

黒猫の姿でテーブルの上に座り、皿に盛られたシチューの具である豚肉を食べていたブリュンヒルデは、自分の主であるアリアの発言に固まる。ブリュンヒルデは、くわえていた豚肉を皿に置き、顔を上げるとシチューが入った鍋を挟んで、真剣な表情のアリアがいた。

ブリュンヒルデは、じつとアリアの顔を見る。一方アリアは、そんなブリュンヒルデの態度に不安が込み上げてきたのか、少し眉をひそめる。

「やつぱり駄目かな……？」

「後悔しなければ、別に構わないわ」

しばらくアリアを見ていたブリュンヒルデは、やつぱり再び豚肉を食べ始めた。

「うん。ありがとう」

ブリュンヒルデから了解を得たアリアは、満面の笑みを浮かべながらシチューを口に運んだ。

第11話（後書き）

以上で、第11話をお届けいたします。

ハンターの方をあげおりましたが、またこつちを更新していく
たいと思います。

フェイトが登場しましたが、特に主人公を鉢合わせをすることなく終了しました。

今回のキモである、アリアとフェイトの邂逅ですが、次回という形になります。温泉回は、数話先を予定しております。少し日常を挿んでからとなります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0378v/>

魔法少女リリカルなのは～灰色の軌跡～

2011年11月1日23時20分発行